



昨年の夏に開催された「車いすバスケットボールキャンプ」の様子

特集 福祉のまちづくり

人が変わる、街が変わる、取り除こう、あらゆる障壁を

現在、市内には、身体や視聴覚、知的、精神など、何らかの障害のある方が約87,000人暮らしています。また、今年の秋には、DPI世界会議が開かれ、国内外からたくさんの障害者が札幌にやって来ます。

障害のある方はもちろん、お年寄りや子供連れなど、だれもが安心して自由に行動できる街へ。

そんな「福祉のまち」を実現するためには、何が必要なのかを考えてみたいと思います。



国内外から二千人が参加する「DPI世界会議札幌大会」が開催されます

札幌大会のキャラクター

「もう一つの二〇〇二年」

これは、十月に開催される障害者インターナショナル（DPI）世界会議札幌大会のキャッチフレーズの一つです。市民の関心が高い六月のワールドカップサッカー大会に関連付けて、札幌大会の開催をPRするものですが、

ご存知でしょうか。

障害者自らが運営主体となるこの国際会議は、四年に一度開催されます。日本では初めてとなる札幌大会には、世界百力国以上から障害者はもちろん、福祉関係者や介助者など約二千人が参加。あらゆる障壁を取り除き、違いと権

利を祝おう」を大会テーマに、障害者の問題について幅広く話し合います。

「障害は不幸で哀れむべき慈善の対象ではなく、人権の問題として考えていかなければなりません。昨年十一月に開催した『一年前ブレ大会』でも、世界会議のジョシユア

・マリಂಗ議長が繰り返し強調していました」と語るのは、札幌大会組織委員会の西村正樹事務局長。DPI世界会議を札幌で」という福祉関係者の夢を実現した立役者の一

人です。

札幌大会では、全体会議や分科会を設けるほか、市民向けのイベントも開催。最終日には大会宣言を採択し、二十一世紀最初の大会を、長年の課題である国連での障害者の権利条約制定に結び付けていく考えです。

全世界から注目が集まる札幌大会を成功させるためには、市民の幅広い支援が欠かせません。障害者の国際会議では、国により食事や生活習慣が違

ども異なるため、一人ひとりにきめ細かな対応が必要となります。「通訳や要約筆記者、リフトワゴン車の運転手などボランティアの養成は最重要課題です。市民の皆さんには、さまざまな形で大会の運営に携わっていただき、障害者との交流を深めてもらいたい」と西村事務局長は語ります。

車いすバスケットボールを通じて、障害を超えた交流

DPI事務局では、市民に広く協力を呼び掛けていくた